中世奈良における「郷」の形態

ON URBAN FORMS OF "GOU" IN MEDIEVAL TIMES OF NARA

土本 俊和*

Toshikazu TSUCHIMOTO

This paper makes out the original urban forms in medieval times of Nara. Medieval Nara which had established on the ancient gridiron plan had the typical residential districts called "Kosatsuki-Gou". "Kosatsuki-Gou" consisted of small "Gou" which had the wayside shrines at the street corners. This type of "Gou" formed their residential area around the crossroads. The paper concludes that medieval Nara made cross-shaped urban area around wayside shrines at the crossroads. This cruciform urban area was different from the form of "Ryougawa-Chou" which stood on the both side of street in Kyoto.

keywords: crossroads, wayside shrine, street corner, alley, Ryougawa-Chou, Kosatuki-Gou

辻、辻堂、町角、辻子、両側町、小五月郷

1. 研究の目的と方法

本研究の目的は、都市域の原初的な形態を把握することにある。奈良において、中世にて郷と呼ばれた都市域は、近世に入ると町と呼ばれた。奈良における郷ないし町は、庶民の住居が集まって成立していた都市域であった。この住居集合が形態として成立する根拠を本論は把握する。

奈良と同様に成立が古代に遡りかつ格子状の街路網をもつ京都の場合、町と呼ばれる住居集合が両側町という形態へと変容していった、と現在のところ理解されている。古代の条坊制を下敷きとした四行八門制による区画が、四面町へと向かい、さらに四丁町へ、さらにまた両側町へと変容するといった秋山國三が提示した展開過程¹⁾は、多くの研究者が自ら実証することなく支持してきた仮説²⁾であったが、現時点ではもはや再検討が必要である。

中世後期京都の両側町に関する知見には再検討が必要だとはいえ、近世中期以降の京都の町の姿に注目したとき、圧倒的多数の町が両側町の形態をとっていた。この事実を否めない。両側町を圧倒的な多数派とする近世京都に対して、近世奈良には辻を基点とした十字形の町がみられる。

奈良に関する建築的な考察には伊藤鄭爾の研究(1954・60年)³⁾と工藤圭章の研究(1964年・1976年)⁴⁾があるが、この問題を扱っていない。その後、『奈良(Ⅰ)(元興寺周辺地区)』(1982年)のなかの「町のなりたち」⁵⁾にて山岸常人がこの問題をとりあげることになった。ここで山岸は「町割の類型」を整理している。山岸

によれば、Ⅰ型からⅣ型までの4種類のうちⅡ型が、「四辻を中心に村落があり、それが拡大していった結果」できた町割である。この「四辻を中心に」した町割と両側町になるその他の町割(Ⅰ型、Ⅲ型、Ⅳ型)との間にある成立の先後関係を検討していない山岸の論点は、基本的に秋山説を踏襲している。『奈良(Ⅰ)(元興寺周辺地区)』における山岸の整理を再検討した猪又規之は、『近世奈良町に関する都市史的研究』(1988年)⁶⁾および「奈良町」(1990年)⁷⁾にて、近世奈良町における十字形の町、すなわち「辻の四周を囲むかたちで一町をなすもの」⁸⁾に注目した。「辻の四周を囲むかたちで一町をなすもの」に関する猪又の見解は、以下の通りである。

中世興福寺寺門郷に属する町は、多くこの型の町割をとっている。『奈良坊目拙解』によれば、この型の町のいくつかは辻堂を構え、これを会所としていたと言い、中世でも早期に成立していた寺門郷の領域・形態を継承するものと思われる。

辻の四周を囲むかたちの町が成立した時点の中世の早期に想定した猪又の指摘は、すこぶる独創的である。猪又が「奈良町」(1990年)に掲載する「町割の分布」は、奈良町の町割の分布を、猪又なりの四つの類型に即して図化したものである。

このとき、「町割の分布」を図化する第一の方法は、奈良町の都市形態の全貌を記した明治23年(1890)「奈良町実測図」⁹⁾に基づく。この巨大な都市図を観察するなら、奈良町の全域を通して辻を起点とした町を都市形態として峻別することができる。「町割の分

* 信州大学工学部社会開発工学科 助教授・博士(工学)

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Shinshu University, Dr. Eng.

布」を図化する第二の方法は、『奈良坊目拙解』¹⁰⁾に基づく。『奈良坊目拙解』は、この四辻からなる町域を個別町に即して解説している。たとえば、以下のような表現で四辻からなる町を『奈良坊目拙解』は示す。

○東城戸町 當町有四辻于中央東西南北四至共為一郷也、¹¹⁾

○薬師堂町 謂南北町曰薬師堂、謂東西町曰御霊前町、俱為一郷也、¹²⁾

『奈良坊目拙解』によれば、東城戸町は四辻がある中央で東西南北の四周を一郷としている。また、薬師堂町は薬師堂に起源する南北町と御霊前町とよばれる東西町がともに一郷をなす。東城戸町と薬師堂町はともに四辻を基点として東西南北で一郷を形成する。

この十字形からなる町域を、本論は、「奈良町実測図」や『奈良坊目拙解』といった明治期や近世の史料に基づくのではなく、中世後期の史料に基づいて把握する。たとえば、興福寺所蔵「簡聚図絵鈔」所収の大乗院尋尊筆「小五月郷指図写」(指図A・後掲)という15世紀後半の史料には、「浄土郷 東西行南北行」という記載がみられる。浄土郷は後の東城戸町であるが、「浄土郷 東西行南北行」という記載形式は、「脇戸郷 南北行」という記載と対比される。「脇戸郷 南北行」という記載は、脇戸郷と呼ばれた住居集合が、一本の通りの両側に町屋が建ち並んだ状態を示している。脇戸郷は、いわば両側町として理解される住居集合であった。他方、「浄土郷 東西行南北行」という記載は、浄土郷が東西軸と南北軸からなる二つの交わった通りの両側に町屋が建ち並んだ状態を示している。この状態は、両側町として従来理解されてきた住居集合と鋭く対立する形態である。すなわち、辻を起点とする十字形の住居集合が、中世後期奈良において、両側町と対立して存在していた。浄土郷にみられるような十字形の郷は、興福寺郷の大半を占めていた点からして、単なる例外ではない。このような十字形の集合形態は、奈良と同様に格子状の街路形態をもつ京都と比較する価値があろう。従来、京都は中世後期から近世初頭への転換過程で街路を軸とした両側町が広範に成立したと理解されてきた。しかし、両側町がどの程度の範囲で成立していたかは現段階で十分に実証されていない。今後、京都や奈良といった、古代に成立した二つの都市が、格子状の街路パターンの上で展開した形態を比較しながら検討することが課題となる。その課題の前提として、辻の四周を囲む都市共同体の

形態と成立過程を把握しておく必要がある。

2、四辻を囲む郷の形態

四辻を囲む郷を以下に検討する。このとき、土地関係史料に即しながら、土地形態の実態を抽出する。

2-1 近世の形態一角振・内侍原

四辻を囲う郷の近世における形態として、明和9年(1772)角振町宅地割図(図1参照)¹³⁾および天保5年(1834)内侍原町屋敷図(図略)¹⁴⁾をとりあげる。

近世の角振は、『大乗院寺社雑事記』¹⁵⁾長禄3年(1459)7月8日条に「ツノフリノ左近次郎男二」と中世後期に名が出る郷であった。また、『大乗院寺社雑事記』文明12年(1480)6月19日条に収める「奈良中南北七郷在所事」のなかでは、「西御門郷」の項目のなかに「角振北ノツラ」と、「不開御門郷」の項目のなかに「角振南ノツラ」とに、その名を連ねている。図1の通り、角振は四辻を囲う形態である。辻の東北の角には会所がある。

他方、近世の内侍原は、先の「奈良中南北七郷在所事」のなかの、「穴口郷」の項目のなかで「内侍原」と中世後期に名を連ねている。辻の南西の街区の奥には八嶋宮がある。

このように、角振と内侍原の二つの屋敷割図から、四辻を囲う郷の近世における形態を確認することができる。

2-2 16世紀後半の形態—東城戸—

角振も内侍原も16世紀後半の史料にその名があった。ならば、16世紀後半の史料そのものに即して形態を把握することはできないか。その一例として東城戸^{ひがしじょうど}をとりあげる。東城戸も、『奈良坊目拙解』が記すように、四辻を基点とする東西南北で郷と形づく。東城戸がこのような都市形態をとることを示す史料として、元龜3年(1572)8月16日「小五月郷間別改打帳 全」¹⁶⁾がある。この史料は、個々の郷に対して、個々の地口の間口規模と家主を記し、しばしばその地目を書き添えている。この記述形式から、個々の屋敷の配列がわかる(図2参照)¹⁷⁾。北の十字路が「辻」で、南の十字路が「アシメノ辻」である。二つの辻を繋ぐ南北路の中央

図1 明和9年(1772)角振町宅地割図(猪又・1988年)

図2 元龜3年(1572)東城戸郷復元模式図(藤田・1988年、註17)

に「キト」がある。「アシマメノ辻」を基点とする「キト」より南の領域は、「阿字万字」と称される郷に近いが、ここでは東城戸に属している。

以上、小五月郷の間別銭に関わる史料群のなかで、元亀3年8月16日「小五月郷間別改打帳全」に注目し、東城戸をとりあげること、四辻をとりまく郷を把握した。

2-3 15世紀後半の形態—薬師堂・福智院—

ここでは15世紀の形態を当該期の史料に即して把握する。小五月郷に関しては、先にとりあげた間別銭の台帳ばかりではなく、15世紀後半の都市形態を記した指図が数点知られている。その史料は以下の3点からなる。

指図A(図3): 文明4-6年(1472-74) 大乘院尋尊筆「小五月郷指図写」¹⁸⁾

指図B(図4): 15世紀後半 小五月郷指図復元図¹⁹⁾

指図C(図略): 文明2年(1470) 小五月郷南部の図²⁰⁾

以上3点の絵図のなかで、四辻からなる郷を示す史料として、指図Aと指図Bをとりあげたい。

まず指図Aの図中に記された文字情報から、四辻から成る郷を把握することができる。とくに、指図Aに記された以下の部分が重要である。

小五月郷

餅飯殿郷 北方南方	浄土郷 東西行南北行	阿字マメ 東西行
脇戸郷 南北行	高御門 南北行	西ナル河 南北行
東ナル川 東西行	無縁堂 東西行南北行	薬師堂 東西行南北行
内院辻子 東西行	河上 東西行	京ハテ 東西行南北行
井上 南北行	貝塚 南北行	辰巳辻子 南北行
南鶴井極楽坊 南北行	北鶴 南北行	西桶井 東西行
東桶井 東西行	塔本 南北行	南光院 東西行
辰巳小路 南北行	幸郷 東西行	頭塔 南北東西行
岩井 南北行	南市内	

以上小五月銭郷也、

福智院郷 南北行東西行 松谷郷 南北行東西行

以上同神輿郷也、

此郷之間、悉以開山本願御領也、仍小五月会方致其沙汰、本願以来、或者配分一乘院、或者配分七郷、雖然小五月会方ハ猶以本願正統大乘院方ニ被留之了、

以上の文字情報は、郷が成立している姿を記している。すなわち、その表現には、①「餅飯殿郷 北方南方」、②「浄土郷 東西行南北行」・「福智院郷 南北行東西行」、③「脇戸郷 南北行」・「阿字マメ 東西行」、④「頭塔 南北東西行」、⑤「南市内」、といった5種類がある(表1参照)。

①「北方南方」は餅飯殿郷だけに用いられている。②「東西行南北行」(あるいは「南北行東西行」)は、浄土郷のほか、計6の郷に用いられている表現である。③「南北行」は計11の郷、「東西行」は計8の郷に用いられている。④「南北東西行」は頭塔だけに用いられている。⑤「内」は南市内だけに用いられている。この南市内は、安田次郎「奈良の南市内について」²¹⁾に詳しい。安田によれば、南市内は、奈良町の南部にあって、限定された土地で催されていた市であった。それゆえ、その他の郷と異なり、格子状の街路と係わらない。街路軸に規定されていない、その他の郷とは異なる南市内は、指図Aのなかに「南市内」と記されていた。南市内の他に、餅飯殿郷の

表1 郷の分類 (指図A: 大乘院尋尊筆「小五月郷指図写」に基づく)

分類	基軸 (指図Aより)	名称 (指図Aより)	堂の名称 (指図Bより)	堂の形態と位置 (■指図Aにあり (□指図Bにあり))
①	北方南方	餅飯殿郷		
②	東西行南北行	浄土郷 無縁堂 薬師堂 京終	薬師堂	■ 町角(南西) ■□町角(南西)
	南北行東西行	福智院郷 松谷	地藏堂	■□町角(南東)
③	南北行	脇戸郷 高御門 西鳴川 井上 貝塚 辰巳辻子 南鶴井極楽坊 北鶴 塔本 辰巳小路 岩井	地藏堂 地藏堂(同上) 毘沙門堂 地藏堂	□街路(東側) □街路(東側) □街路(西側) □街路(西側)
	東西行	阿字マメ 東鳴川 内院辻子 河上 西桶井 東桶井 南光院 幸郷		
④	南北東西行	頭塔	水上薬師	■□街路(西側)
⑤	内	南市内	南市堂	□街路(行詰)

「北方南方」といった表現を例外として、その他のすべての郷が、「…行」と記されていた。「…行」は、街路の基軸に規定された郷であることを示す。このうち、「東西行」と「南北行」は一つの街路に規定された形態である。対して、「東西行南北行」は、直交する二つの街路に規定された形態である。とくに、「東西行南北行」は四辻と係わる。以上より、指図A(図3) 大乘院尋尊筆「小五月郷指図写」が記す計28の郷のうち、「東西行南北行」(あるいは「南北行東西行」)と記された計6の郷が興味深い。

「東西行南北行」(あるいは「南北行東西行」)となる6つの郷は、指図Aに登場する郷であった。では、この6つの郷を、指図B(図4) 小五月郷指図復元図と照合する。浄土郷、無縁堂、薬師堂、京終、福智院郷、松谷のうち、指図B(図4)に登場する郷は、薬師堂、福智院郷、松谷の3郷である。松谷郷以外の2郷に堂があることが指図Bのなかの文字情報と図形からわかる。薬師堂には「薬師堂」が、福智院郷には「地藏堂」がある。これらの堂は、逆に、四周を線で囲った部分が指図A(図3)のなかにあることから確認することができる。以上、薬師堂、福智院郷といった、四辻を囲む郷のなかに堂がある事例を15世紀後半奈良の史料そのものに即して抽出した。

さらに、指図A(図3)から、辻の角に建つ堂を、言葉だけではなく形態として把握することができる。とくに、指図A(図3)のなかで「東西行南北行」(あるいは「南北行東西行」)と記された6つの郷のなかで、堂の名称が記されていないものの、堂を示す線が指図Aの図中にあるものは、以下である。

浄土郷	南西の角に堂の敷地が記されている。
薬師堂	南西の角に堂の敷地が記されている。

後大慈三昧院殿御筆

図3 指図A：文明4・6年（1472・74）大乘院尋尊筆「小五月郷指図写」（興福寺蔵「簡聚圖絵鈔」所収）

福智院郷 南東の角に堂の敷地が記されている。
すなわち、四辻を囲う郷でしかも図形として堂が記されている郷は、指図Aのなかでは、浄土郷、薬師堂、福智院郷の3郷である。つまり、先に抽出した薬師堂郷、福智院郷に、浄土郷（後の東城戸町）を具体例として付け加えることができる。

この3郷のほかに、指図A（図3）は、辰巳小路と南光院が交わ

る辻の北西に堂を図形として記している。また、指図B（図4）は、図中に堂をいくつか記している。その堂のうち、地藏堂（鶴郷）、毘沙門堂（塔本郷）、薬師堂（薬師堂郷）、水上薬師（頭塔郷）など、郷と対応するものがある。

以上、四辻を囲う郷は、そのすべてではないが、その辻の角に堂をもつ。その事例を、15世紀後半奈良の史料に即して抽出し得た。

圖4 指図B：15世紀後半小五月郷指図復元図（土本・1993年、註19）

3、辻堂と郷の関連

以上の考察に基づくと、15世紀後半の時点で、辻堂と郷が互いに関連しながら都市形態が生成されたと想定される。この想定を踏まえて、郷との関係から辻堂のあり方を以下に考察する。堂のあり方を記す史料として、『大乘院寺社雜事記』康正3年(1455)4月28日条が有力である。

一元興寺ノ前ノ薬師堂ノ郷者、一方ヲハ大乘院家知行、一方ヲハ一乗院家知行、薬師堂ハ一乗院知行ノ方ニアリ、両門知行ヲ打合テ郷ノ名ヲ云薬師堂也、仍郷ノトネ職ヲハ両方知行内ノ年ヨリヲトネニハ成也、然間トネ一乗院方ニアル時モアリ、大乘院方ニアル時モアリ、不定也、是昔ヨリノ掟也、于今不相違者也、知行ハ各別也、自然ノ時使等ヲ入時ハ、自他案内ヲ令申也、此門跡ヨリ人夫等ヲ下知ノ時ハ、トネ男此方ニアル時ハトネニ仰付之、トネ他領ニアル時ハ只地下へ仰付也、

當年ハトネ當方ニアリ、毎事惣郷事トネ相催テ、薬師堂ヲ集會所ニ令沙汰會合評定スル也、抑當年小五月錢就下知、薬師堂郷ノ二臈一乗院方ニアリ、此二臈申テ云、惣郷ヲ薬師堂ト云、是堂ニ付タル名ナリ、堂ハ又一乗院知行方ニアリ、然者於少五月錢者爲一臈可取沙汰云々、希代ノ申狀也、如此申入所存ハ、此小五月郷ハ何ノ郷モ一臈トネ事也ヲハ閣之テ料足ヲ不出、此一分ヲ不可出用ニ、新議ヲ申出也、惣郷ノトネ何ソ此一事計可爲各別哉、以外ノ申狀不可然之由仰付了、奉行繼舜威儀師也、

以上の説明によれば、「薬師堂ノ郷」は大乗院家知行と一乗院家知行の二者からなっていたが、「薬師堂」は一乗院知行であった。「毎事惣郷事トネ相催テ、薬師堂ヲ集会所ニ令沙汰会合評定スル也、」とあるように、薬師堂を集会所として会合評定がおこなわれていた²²⁾。すなわち、堂には、集会所としての内部空間があり、

そこで定例の催しが行われていた。このとき、薬師堂は、薬師堂の郷を統合する施設であったと想定することができる。

4、郷を構成する形態

これまで、四辻を囲う郷を分析してきた。しかし、郷を構成する形態はかならずしも四辻を基点としているわけではない。郷を構成する最小の土地は、街路の片側にある土地である。この土地が集まることによって、四辻を囲う構成がみられるようになると想定される。中世後期奈良では、Ⅰ片側の郷、Ⅱ両側の郷、Ⅲ四辻からなる郷の三種がある。それぞれに実例がある。

4-1 片側の郷の事例—高御門郷—

高御門郷は、指図A（図3）では、「高御門南北行」と記された小五月郷の一つであり、南北軸の街路に「高御門」が図中にみえる。とくにこの街路の東側は元興寺の境内であった。しかし、「高御門」の文字の両脇には「小五月」の文字がそれぞれ記入されているので、この街路の両側が小五月郷である。とはいえ、長享元年（1487）には、以下の史料のように高御門郷の東西双方の頬を郷とするか否かでもめている。『大乘院寺社雑事記』長享元年（1487）11月24日条に注目したい。

一高御門郷ハ西頬七郷也、東頬元興寺々内也、祭礼細男米事、東方ニ相懸之、郷民等歎申入之間、沙汰中ニ披露之處、去年まで致其沙汰云々、糾明之處如然云々、以外事也、更々非可拘七郷儀之由、集会書状到来、尚々沙汰衆辺ニ、此事ハ小事題目也、無力、以之自余事を如七郷至其沙汰者、不可然旨堅仰遣之、この史料によれば、高御門郷は西頬だけで、東頬は元興寺の寺内であった。このため、祭礼細男米を東方にも懸けたために、問題が生じたというものである。このように高御門郷は、原初的には南北軸の街路の西頬だけを郷としていた。

4-2 両側の郷の事例

先に述べた片側の郷に対して、両側の郷の方がはるかに一般的であろう。指図A（図3）大乘院尋尊筆「小五月郷指図写」が「東西行」ないし「南北行」と記した小五月郷のなかで、図中では、街路の両脇に「小五月」と記されたものがそうである。

4-3 四辻からなる郷

四辻からなる郷は本論のテーマであった。指図A（図3）大乘院尋尊筆「小五月郷指図写」が「東西行南北行」（あるいは「南北東西行」）と記した郷である。

指図A（図3）に記された形態と文字情報を分析すると、小五月郷を構成する形態は、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの3種類にまとめられる。このとき、小五月郷を構成する最小単位は、指図A（図3）に記された「小五月」という文字情報に対応する。この「小五月」は、街路の片側のみの土地から成る。したがって、15世紀後半奈良における小五月郷は、街路の片側のみの土地から成る「小五月」の集合体であった。この「小五月」が四辻に集まれば、四辻を囲う郷が成立する。

5、「小五月」の集合原理

四辻を囲う郷は、街路の片側の土地で成立した個々の「小五月」が集まった形態であった。この「小五月」を構成する個々の地口には、人家のほかに、「畠」、「ハタケ」、「アン」、「家ハタケ」などがあったことが、大永5年(1525)11月4日「御領内元興寺領地口銭帳

全」²³⁾からわかる。このとき、「小五月」を構成する要素を辻を起点とした形態にまとめあげる力として、堂が想定される。街路の片側で成立していた「小五月」が郷としてまとまった場合、四辻を囲う姿となって十字形をなす場合がある。そのまとまりを秩序づける構築物として、辻の角に建つ堂があった。堂は、『大乘院寺社雑事記』康正3年4月28日条のなかの薬師堂の説明にあったように、会合評定が行われる集会所であった。街路の片側の「小五月」とこの辻堂との関係から、四辻を囲う郷を説明することができる。

さらに、堂の成立、個々の「小五月」の成立、四辻を囲う郷の成立といった三者が連動する過程が考えられる。このとき、注目すべき事柄は、街路のもつ方向性である。

指図B（図4）小五月郷指図復元図のなかの「辻子」²⁴⁾を観察すると、「辻子口」という書き入れがあることに気づく。「元興寺」と「禪定院」（つまり大乘院）との間に「西馬場」という太い街路がある。この街路の南と北に細い街路がある。この二つの細街路が辻子である。この辻子の西側の部分、すなわち、元興寺の寺内に面した部分には「辻子口」という記載がある。この「辻子口」は、細街路の入り口であろう。ということは、この細街路は、東西が均質なのではなく、西側の「口」から東側に向かうにつれて奥に至ることを意味する。すなわち、15世紀奈良の「辻子口」は細街路に方向性を与えている。「西馬場」の南北にある二本の辻子のほかにも、「辻子口」はある。十輪院の南側の街区のなかを南北に走る細街路が「今辻子」である。その北側に「辻子口」という記載がある。また、窪郷から西へのびた袋小路には「窪辻子口」という記載がある。

以上、指図B（図4）にみられた、「辻子口」に関する4例が示すように、中世後期奈良の細街路にはその軸線に方向性があつた。さて、『奈良坊目拙解』による京終の説明が興味深い。

○當名ハ上古平城ノ京非謂京終、後代奈良民戸衰敝而漸終人家此辺、仍謂京終焉、²⁵⁾

一般に、都市域の拡大過程、あるいは都市域の高密化の過程は、都市の均質な土地のうえで、場当たりの展開するのではなく、何らかの基となる点や線や面が想定される。京終の場合、その立地と成立は古代の平城京に規定された都市域に対応するのではなく、後に奈良の民戸が衰微してようやく人家がなくなった辺に対応するという。このように人家の有無で都市域を規定する場合、都市の中心とその周辺といった方向性が成立する。辻子がつくられる契機は都市域の高密化である。この場合も既成市街地の中心とその周辺といった方向性が生じる。

「辻子口」と持つ辻子と同様に、四辻を囲う郷の場合も、四辻を基点とした方向性が想定される。街路の片側の土地に成立した「小五月」が四辻で集まって、十字形の郷を成すとき、四辻に向かう向きの方向性があつたであろう。

6、郷成立の源泉

「春日社記録」²⁶⁾弘安3年（1280）5月6日条には以下の記載がある。

六日、恒例郷民小五月若宮へ参天遊、次第、今朝雨降之間、自午時参、先幸郷、次桶井、次笠サギ、次薬師堂、次京終、次木辻子、次高御門、各面々進御幣、神人取天備之、この史料にしたがうと、いままで扱ってきた薬師堂や京終や高御門

などは、郷の名称に関する限り、弘安3年(1280)には成立していた。中世前期奈良は、古代に施された格子状の街路パターンにその成立の基盤がある。平城京の外京に中世奈良は対応する。古代に遡る街路パターンに秩序づけられながら、人家が立地し、さらに郷と呼ばれる町なみが成立した。このとき郷民の人家は町屋と了解されるもので、街路に面して立地していた小規模な建物であったろう。中世後期奈良には、畠や空地に人家が混じりながら集まって一郷を成すとき、街路を基盤とした求心的力が働いていたと想定される。その力を示唆する形態が四辻を囲う十字形の郷であった。この郷の場合、四辻の角にある堂が、人々や建物を四辻に集める力であったろう。以上の考察を踏まえるなら、中世に奈良が成立し、かつ展開していく上で、堂が果たした役割がきわめて大きかったといえる。このとき、堂が発揮した吸引力の内実とは何であったかということが、奈良の形成史にとって問題となる。

四辻を囲う郷と対照的な小五月郷に「南市」があった。安田次郎がすでに指摘したように²⁷⁾、奈良の南市はエビスという祭神と関連して成立した。そのことを示す史料として、指図B(図4)に以下の書き入れがある。

自南市南エハ能登岩井川至古市マテ大乘院御領也、本市ハ福島市也、自中古被引遷当市仍南ヲハ云古市也、岩井川之エビスノ社ハ福島市ノ御神也

能登川と岩井川は、ともに奈良の南部を東から西へ流れる川である。この二つの川は、大安寺南方で合流した後、佐保川に流入する。この書き入れは、第一に、「自南市南エハ能登岩井川至古市マテ大乘院御領也」とあるように、南市から南へ能登川と岩井川に至るまでが大乘院の御領だとしている。第二に、「本市ハ福島市也」とあるように、南市は福島市である。第三に、「自中古被引遷当市仍南ヲハ云古市也」とあるように、「中古」より引き遷されたこの南市を「古市」というのだと記している。第四に、「岩井川之エビスノ社ハ福島市ノ御神也」とあるように、岩井川のエビスの社が福島市の御神だと記している。

以上、四点の記述は、尋尊による記述であるから、大乘院側の主張を基本にしている。大乘院側の主張と係わる第一の項目、すなわち南市から南の領域が大乘院の御領か否かを見定める前に、第二と第三と第四の項目を扱うことが許される。すなわち、南市は福島市で、「中古」に引き遷したので古市といい、岩井川のエビスの社が福島市の御神だという指摘である。ここにいう「中古」は、『邦訳日葡辞書』²⁸⁾に従えば、「Naca mucaxi. (中むかし) 近代のこと、あるいは、さほど古い時代のことでないこと」である。ナカムカシ(中昔)は、「さほど多くは年数がたっていないこと、あるいは、大昔ではないこと」である。すなわち、「中古」は、さほど古い時代でのことではなく、むしろ比較的近い過去を指す。

指図B(図4)には、「南市堂」との書き入れがあることから、南市にも堂があったことが確かめられる。安田「奈良の南市について」によれば、「南市堂」は観音堂であり、しかも福島市から南市に移動したときに市の祭神の変更があつて、エビスが捨てられ、観音に乗り換えられた。この観音は南都では例をみない市神とのことである。市立てに際して、観音を勧進した西大寺流の律僧の存在を安田は指摘している。ただ、「南市にはエビスがまつられることはなかったとすべきだろう」と安田はいうが、「南市堂」つまり「観

音堂」にエビスはなくとも、指図B(図4)に「岩井川之エビスノ社ハ福島市ノ御神也」とあるように、奈良の南の境界に当たる岩井川のあたり、すなわち「岩井川之エビスノ社」にエビスは居ただろう。

以上、南市の成立にはエビスが係わり、そのエビスは「岩井川之エビスノ社」に居た。また「南市堂」は「観音堂」であり、南市の祭神は南都では珍しい観音であった。よって、「南市堂」は、「薬師堂」や「地藏堂」や「毘沙門堂」と異なる。すなわち、「南市堂」は、奈良の小五月郷におけるその他の辻堂と異なる。

以上、奈良の南部の最も外れたところに位置した南市は、観音に加護される都市域であった。さらに、南市は、「南北行」や「東西行」と表現された、街路に従う都市域ではなく、「南市内」と表現された、面的な領域を形成していた。また、南市へ市が引き遷された年代は、「中古」とされているから、さほど古い時代ではない。永島福太郎によれば、南市の設立は1290年ころである²⁹⁾。

南市とは対照的に、その他の郷は、街路に従う都市域であった。とくに、四辻を囲う十字形の領域を示していた郷は、辻の角に堂を設けていた。この辻堂に安置された神仏は、エビスや観音ではなく、薬師や地藏や毘沙門であった。このとき、四辻を核として郷が形づくられるにあたって吸引力を与えたのは、会合評定を行う集会所としての堂であった。さらに、その吸引力の原形を探るならば、薬師や地藏や毘沙門といった庶民に信仰が受け入れられた仏であったろう。その成立は、南市が設立された1290年ころを遡る。たとえば、辻堂の典型例である薬師堂の場合、『春日社記録』弘安3年(1280)5月6日条にその名が記されていた。すなわち、庶民に受け入れられた仏をまつる堂を辻に持つ、四辻から成る郷は、その成立が弘安3年(1280)を遡る可能性がある。これらの郷は、1290年ころに奈良の周辺部に後から付け加えられた南市と対極をなす。

7. 結論

中世奈良では、平城京の外京に対応する格子状の街路パターンを骨格として、十字路を核とした十字形の郷が形成された。四辻を囲う、十字形をなす郷は、15世紀後半の史料からその形態を把握することができた。とくに、四辻を囲う形態は、辻の角に建つ堂を結晶核として成立した。四辻を囲う郷で、辻に堂を持つ郷の一部は、13世紀後半にはすでに成立していた。その堂は庶民信仰の対象になる仏と関連していたであろう。

□参考文献・引用および註

- (1) 秋山國三「桑坊制の「町」の変容過程—平安京から京都へ—」(秋山國三・仲村研『京都「町」の研究』法政大学出版会、1975年)
- (2) 秋山國三の仮説に疑問を投げかけた京都に関する考察は二点提出されている。①吉田伸之「近世前期の町人と町」(五味文彦・吉田伸之編『都市と商人・芸能民—中世から近世へ—』山川出版社、pp.245-289、1993年11月)、②土本俊和「近世京都における祇園御旅所の成立と変容—領主的土地所有の解体と隣地境界線の生成—」(『日本建築学会計画系論文集』456、pp.227-235、1994年2月)。①「近世前期の町人と町」にて吉田は、「独立的な片側町の複合体として、両側町が構成される事態が広汎にみられたことを示唆する。単一の両側町の形成は、それ自体、近世化の過程にみられる固有の過程なのかもしれない。」と指摘する。他方、②「近世京都における祇園御旅所の成立と変容」にて土本は、「四丁町から両側町への転換は秋山論文において仮説として提示されているにとどまる」としている。
- (3) 伊藤鄭爾「小五月郷の家屋の規模分布—中世奈良の研究(1)—」(『建築史研究』14、pp.1-11、1954年)、同「中世奈良に於ける風呂・上水・洗濯につ

- いて—中世奈良の研究(2)—」(『建築史研究』15、pp.24-32、1954年)、同「中世奈良の住居に於ける就寝状態に就いて—中世奈良の研究(3)—」(『建築史研究』16、pp.16-23、1954年)、同「中世奈良に於ける屋敷価格表」(『建築史研究』20、pp.29-31、1955年)、同「第2回奈良市民家調査研究報告」(『住宅研究』8号・9号、1955年)、同「中世借屋の成立」(『日本建築学会論文集』54、pp.805-808、1956年)、同『中世住居史(第二版)』(東京大学出版会、1958年)、同「中世奈良の町と住居」(『世界建築全集2 日本Ⅱ 中世』平凡社、pp.102-104、1960年)。
- (4) 工藤圭章『ナラの街区変遷過程の研究』(東京大学学位請求論文、1964年)、同「平城京とその後の推移」(奈良市史編集審議会編『奈良市史 建築編』吉川弘文館、pp.15-65、1976年)。
- (5) 奈良国立文化財研究所編『奈良(Ⅰ)(元興寺周辺地区)一昭和57年度伝統的建造物群保存対策調査報告書一』(奈良国立文化財研究所、pp.4・17、1982年)
- (6) 猪又規之『近世奈良町に関する都市史的研究』京都大学修士論文、1988年
- (7) 猪又規之『奈良町』(『日本都市史入門Ⅱ 町』東京大学出版会、pp.206-208、1990年)
- (8) 註7 前掲・猪又『奈良町』
- (9) 奈良県立図書館所蔵
- (10) 村井古道「奈良坊目拙解」(奈良市史編集審議会編『奈良市史編集審議会会報一 付録 奈良曝・奈良坊目拙解』奈良市史編集審議会発行、1977年・喜多野徳俊訳注『奈良坊目拙解』綜芸舎、1977年)
- (11) 註10 前掲『奈良坊目拙解』p.54
- (12) 註10 前掲『奈良坊目拙解』p.98
- (13) 註6 前掲・猪又『近世奈良町に関する都市史的研究』pp.94-96
- (14) 天保5年(1834)内侍原町屋敷図は、土本俊和「近世奈良の町と町家」(『図集・日本都市史』東京大学出版会、pp.258-259、1993年)のなかの図を参照されたい。この図の作成にあたり、奈良県史料刊行会編『奈良内侍原町諸事記録控—内侍原町八嶋神社古文書—奈良県史料第4巻』(豊住書店、pp.352-3、1985年)を参考にした。
- (15) 辻善之助『大乗院寺社雑事記』全十二巻、角川書店、1964年
- (16) 「内閣文庫」古文書25 函464号、国立公文書館所蔵
- (17) 図2 東城戸郷復元模式図は、藤田裕嗣の報告「16世紀奈良をめぐる商品流通の一断面—多聞院日記と小五月銭納帳による分析—」(1988年5月7日)で紹介された「東城戸郷復元模式図」を掲載したが、本図の責任はすべて土本にある。なお、図2に対応する元龜3年「小五月郷間別改打帳全」は以下の通りである。

東城戸郷	
南カワ西ヨリ	
式間式尺	タチハナヤ
辻ヨリ北東ノ角	
七間式尺五寸	大コクヤ 明清殿
巷間三尺五寸	ヲガヤ 棚
北ノカワ東ヘ	
式間六尺	ヒラキヤ 善三郎
三間四尺	同人
成南院ノ内衆残ニハノラス	
式間六尺五寸	○浄教
同町ノヒラキヤノ向南ノカワ	
式間六尺	寿西跡 キヤ助二郎
辻ヨリ南方	
西カワ北ヨリ	
三間五尺五寸	宗恵 行実
三間六尺式寸	ヂヤノ 源四郎
式間三尺	成成跡 衆フ
	前ハ一間
老間三尺五寸	長兵
毎年於辻出ノ地	
三間者	番匠ヤ 源三郎
アシマメノ辻ヨリ北	
キトヨリ南ノカワ	
三間老尺	コウヤ 又五郎
式間三尺五寸	茶ヤ マ三郎
式間者	ヲシロイヤ 源五郎
アシマメノ辻ヨリ北東ヘ	

巷間三尺五寸	与次郎ノ 後家
	タ、跡
巷間三尺五寸	弥五郎
巷間六尺	丸石闕所 チヤウクワン
式間四尺	ナヘヤ 新四郎跡
ヒラキヤノ向	刀禰大東
五間三尺五寸	善四郎
是ハ刀禰ニテ免屋敷 小五月屋子之ハナミ也	

- (18) 図の作成年代は註3 前掲・工藤「ナラの街区変遷過程の研究」(p.146) 参照。この図の陰影は『奈良市史 通史編2』(奈良市、1994年)にある。図の解説ならびに図中の文字の解説は、永島福太郎「小五月郷指図について」(『ビブリア』29、pp.26-33、1964年)にあるが、文字の解説に脱字が多い。
- (19) 土本俊和「中世奈良の門前郷」(高橋康夫・吉田伸之・宮本雅明・伊藤毅編集『図集・日本都市史』東京大学出版会、pp.112-113、1993年所収)。小五月郷指図復元図(指図B・図4)の解説 小五月郷とは天満社の小五月会に必要な祭礼費用を毎年賦課されていた郷で、大乗院領の主要部分が含まれていた。大乗院の周辺を含めた都市形態を描いた「小五月郷指図」と称される絵図は、中世後期に作成された絵図を近世に写したもので、最古の奈良市街図とされる。現在、2点の写しが興福寺と天理図書館に残されている。本図は、天理図書館所蔵の宝暦3年(1753)の写し(「小五月郷指図写」、天理図書館保井文庫文書444「天理図書館蔵」)を現況の都市形態と照合して作成した。「小五月郷指図」の原典である中世後期の絵図については「尋尊自筆小五月郷指図断簡」と称される4枚の断簡(「小五月郷指図断簡」、「天理図書館保井文庫文書443」:15世紀後半(註3 前掲・工藤「ナラの街区変遷過程の研究」p.142 参照)が現存している。この4枚の断簡との比較により、「小五月郷指図」には以下の5点の誤りがある。①断簡の張り合わせの間違いにより南市と岩井郷の位置は松谷の南になる(安田、1991年)。②水上薬師の南の道には「窪辻子」ではなく「窪辻子口」と記載されねばならない(工藤、1964年)。③内院辻子の南では「一乗院家御領」が脱漏している(工藤、1964年)。④紀寺郷にある「堂」が脱漏している(土本、1993年)。⑤窪辻子口の南に「窪郷」と「大乗院御領」が脱漏している(土本、1993年)。上図では、以上の5点を訂正してある。なお、紙面の制約上、一部の文字情報の掲載を割愛したが、「小五月郷指図」と「尋尊自筆小五月郷指図断簡」の中には「小五月郷」という記載はみられない。
- 小五月郷指図復元図(指図B・図4)に関する史料・参考文献 註3 前掲・伊藤「小五月郷の家屋の規模分布中世奈良の研究(Ⅰ)」、註4 前掲・工藤「ナラの街区変遷過程の研究」(1964年)、註18 前掲・永島「小五月郷指図について」(1964年)、森蘊「奈良における庭園遺跡」(『奈良を測る』学生社、pp.20-42、1971年)、高橋康夫「辻子「郷」の展開—中世奈良の発達—」(『京都中世都市史研究』思文閣出版、pp.27-33、1983年)、川上貢「近世における町と村の会所」(『建築指図を読む』中央公論美術出版、pp.153-161、1988年)、藤田裕嗣「奈良」(高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門1 空間』東京大学出版会、pp.246-247、1989年)、安田次郎「奈良の南市について」(石井進編『中世をひろげる』吉川弘文館、pp.374-404、1991年)、註14 前掲・土本「近世奈良の町と町家」(1993年)。
- (20) 図の作成年代は註3 前掲・工藤「ナラの街区変遷過程の研究」(p.48) 参照。
- (21) 註19 前掲・安田「奈良の南市について」
- (22) 註19 前掲・川上「近世における町と村の会所」に奈良町の会所に関する説明がある。
- (23) 「内閣文庫」古文書25 函465号、国立公文書館所蔵
- (24) 註19 前掲・高橋「辻子「郷」の展開—中世奈良の発達—」
- (25) 『奈良坊目拙解』p.20
- (26) 『増補續史料大成第四十九巻(春日社記録三)』臨川書店、p.45、1979年
- (27) 註19 前掲・安田「奈良の南市について」
- (28) 『邦訳日葡辞書』岩波書店、1980年
- (29) 永島福太郎「中世奈良の三市」(『ヒストリア』3、pp.23-30、1952年)、同「中世奈良の市場[沿革篇]上・下」(『日本歴史』101・102、pp.8-13・pp.60-62、1956年)

本論は平成5年度文部省科学研究費補助金(奨励研究A)「中世後期における奈良の都市形態に関する復元的研究」(課題番号05855090)の成果である。

(1996年8月1日原稿受理、1996年12月17日採用決定)